

たぐみ

CraftsmanShip

特集 金城次郎窯三代展

第45号

衣装の美

日本の絞り染と安藤さんの仕事

絞り染の歴史は古く、日本でも奈良時代にシルクロードを通してもたらされた夾纈（きょうせつ）、絞纈（きょうせつ）などの遺品が法隆寺や正倉院に伝世されてきた。

屏風や絵巻物などに描かれている風俗を見ても、室町から桃山時代には色彩豊かな絞りの衣裳が見られ、とりわけ描絵や刺繍、摺箔などを併用した「辻が花」は、その美しい模様と色彩で人びとを魅了してやまなかった。

江戸時代になると木綿と藍染の普及によって絞り染は大衆化し各地に広まるが、なかでも東海道の要、名古屋の有松、鳴海は、型紙彫り、下絵刷り、布の絞り、染色、糸抜き、整理仕上げなどの工程が手仕事ながら分業化され、模様も多様化して一大産地となる。

ところが近代になって、庶民の日常の品にも工業化が及ぶにつれて、すべてが手仕事による絞り染は次第に衰微

し、永年にわたる習熟した技も、百種に余る模様の伝承も、職人の高齢化によって途絶える寸前になっていた。

安藤宏子さんが、大学の地場産業の調査で有松、鳴海を訪れた四十年ほど前もそのような時であった。彼女は絞り染の美しさと、その伝承の技法に魅せられ、その技の習得と継承のためその後の半生を傾注することになる。

そして、先月半ばには、「日本の絞り・安藤宏子の世界」と題した展覧会（九月十日〜十三日・銀座もとじ）が開かれ大好評であった。

染は藍を基調に茜なども用い、布地も絹、木綿、麻、芭蕉布、紙布など変化に富みながら、着尺、帯を中心にふだんに着用するものとしての堅実さ、安定感にあふれていた。絞りの模様も伝承の技法を用いながら創意を生かした、その美しさを現代に蘇らせた感があつた。そして何よりも彼女の絞りに寄せる熱意が来会者を感動させていた。

（十二頁上段に続く）

たくみ企画展

金城次郎窯三代展

— 金城次郎・敏男・吉彦・博美 —

会期 平成二十一年十月三十一日(土)～十一月七日(土)

十一月一日(日)、三日(文化の日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間十一時から十九時まで(日祝日・最終日は十七時半まで)



金城次郎窯三代の作品

三代展に寄せて

金城次郎さんが亡くなられて

五年が経ち、金城窯の三代展も

三回目となります。若い頃から

父、次郎さんを助け、共に切磋

琢磨して金城窯の作風を築きあ

げてきた敏男さん、そして孫の

吉彦、博美さん、それぞれに個

性をもち、すぐれた技と表現力

に磨きをかけています。どうぞ

ご清覧下さい。

■金城 次郎



菊紋蓋物(金城次郎)

12年 那覇市生れ

24年 壺屋で陶器を習う

46年 那覇市壺屋に窯場を開く

56年 国展新人賞

69年 日本民藝館賞

72年 読谷村座喜味に窯を移す

77年 現代の名工

81年 勲六等瑞宝章

85年 人間国宝認定



魚紋抱瓶(金城敏男)

36年 那覇市生れ
 51年 父(次郎)の元で焼物を学ぶ
 57年 国展初入選
 77年 銀座松屋で親子展
 82年 沖展会員
 86年 沖縄県優秀技能賞
 92年 沖縄タイムス芸術選大賞
 01年 伝統的工芸品振興功労者

■金城 敏男



ひさご水差(金城吉彦)

06年 銀座たくみで金城窯三代展
 06年 沖展奨励賞
 04年 銀座たくみで金城窯三代展
 02年 宜野湾市ギャラリーで四人展
 99年 妻・博美と金城陶器所始める
 98年 現代沖縄陶芸展初入選
 90年 父(敏男)の元で焼物を学ぶ
 67年 那覇市生れ

■金城 吉彦



面象嵌葉紋皿(金城博美)

06年 銀座たくみで金城窯三代展
 06年 沖展入選
 04年 銀座たくみで金城窯三代展
 02年 宜野湾市ギャラリーで四人展
 99年 夫・吉彦と金城陶器所始める
 98年 今治市河野美術館で四人展
 94年 焼物を始める
 66年 愛知県今治市生れ

■金城 博美

柳と濱田が語る

宋胡録と呉須赤絵・逸文(一)

志賀 直邦

「宋胡録すんこうろくと丹波の雑器は近頃見た陶器のうちで私には一番力になった。う

けたものがまだ仲々こなしきれず、仕事をしても体のどこからか顔を出す。」これは雑誌「工藝・第九十三号」(宋胡録特集・昭和十四年二月発行)に「宋胡録など」と題して濱田庄司が

記した文の書き出しである。

濱田はつづけて「宋胡録の素地にしても堅く寒く、恵まれた土とは思われない。——宋胡録の蓋物を手にして、枯れた茶褐色のつまみや、白く濁った釉や、そのために軽く藍色を帯びた鉄絵などを眺めていると、貧しい技術のた

めに却って質素で渋い美しさがある」と記している。
また柳宗悦は、同誌の編輯後記に次のように書いている。

「宋胡録はシヤムの地名、スワンカロークの音をあてた字である。ここで十三、四世紀ごろ盛んに焼き物が焼かれた。日本にも相当古くから渡って『茶』の方で夙すくにやかましい。——中에서도多く又美しくもあり一番特色の出ているのは蓋物類である。」

そして柳は、近頃この焼物が沢山



『工藝』第九十三号に掲載の宋胡録三図



「岡野繁蔵氏所蒐・蘭領東印度諸島遺存・陶磁工藝品図譜」に掲載の宋胡録三図

ジャワで見出され、またセレベス島でも数多く発掘され、とみに有名になったことや、とくに南方貿易商岡野繁蔵蒐集による我が国への将来品が、「其の數に於いて又質に於いて卓越し、所々で展観され、又一去る六月七日から八月十四日迄民藝館でも特別展観が催され、シャムや南方支那系の焼物を知るのに絶好の機会を贈った」と記した。

「工藝」誌の「宋胡録特集号」の図

版十八図は、そのすべてが岡野からの将来品であるが、その中から幾つの品が日本民藝館の藏品になったかは判然としない。

だがそのころ、柳が河井寛次郎あての葉書に、岡野氏による宋胡録の品々を一日も早く君に見せたい、としたためていることからしても、民藝館の品々が天下の優品であるのは疑いなし。

因みに今回この逸文を記すに際し

て、筆者は所持する「岡野繁蔵氏所蒐・蘭領東印度諸島遺存・陶磁工藝品図譜」(昭和十四年刊、論考・「序言」素心菴生、「東印度に於ける古陶磁器」斎藤正雄)と「工藝・第九十三号」を原資料とし、さらに小山富士夫「安南の陶器」、矢部良明「タイ ベトナムの陶磁」、長谷部楽聖「インドネシア半島の陶磁」などを参照したが、驚いたことに参考資料のなかで、岡野繁蔵の蒐集と業績に触れた論考が一つもなかつ

たことであつた。

もう一つ気のついたことがある。それは明、清などの官窯は別として、近世陶磁の内、宋胡録や呉須赤絵などの民窯系の鉄絵、彫絵、染付、赤絵などにおいて、類似することはあつても同一の文様は、まずない、ということである。これについては別掲の蓋物の写真図版を参照していただきたい。いづれも岡野氏蒐集のものだが、「遺存・陶磁工藝品図譜」掲載の品と「工藝」掲載のものとおわせ対照すると、同一のように見えて形態、模様の微妙な相異が見られるのがわかる。

さて、そこで思い起こすのは、沖繩の金城次郎の陶業である。

あるとき次郎作の水筒、およそ二〇個余りを見たことがあつた。もとより同じころの作である。形態は大小含めて十数種、文様は流し釉、象嵌、彫文、いっちゃん、染付あるいはそれらの併用である。彫文の模様にはハート形やトランプのカード、草花文、幾何文、線文など。金城次郎の場合、時にもよ

るが興のおもむくまま実に自由にモノを作る。一つとして同一のものがない。

とりわけいくら作つてもなかなか売れなかつた壺屋時代には、人からの注文ではなく、自らの創意と作る喜びが制作の原動力になつたことであらう。工人がモノ作りに際して自らの意思を持つことも、創作の多様性を生み出す源泉とならう。

工人の心の自由さ、ということでは、次郎さんと近世・東西の工人の仕事の類似に思いを巡らせるのである。

金城さんの晩年、しかしまだ元気に作陶をつづけておられたころ、「次郎さんの魚文などの模様の原因は、安南やタイの焼物ですか」とお尋ねしたことがあつた。すると少し間を置いて「朝鮮だな」といわれたのであつた。

次郎さんの蓋物や香合が宋胡録を彷彿させ、また安南の魚文の絵皿を思つたからだつたが、次郎さんの心のなかにやはり朝鮮の李朝の焼物が強くあつたことに何かほつとしたのであつた。

(つづく)

十一月の企画展

瀧田ふあみりー展

出品品目

項一 硝子繪・陶額

史字 磁器食器・その他

さりな 創作キャンドル

会期

平成二十二年十一月二十六日(木)

十二月一日(火)

十一月二十九日(日)は営業

会場

たくみ二階ギャラリー

瀧田先生ご一家のファミリー展は十二年ぶりになります。とくにさりなさんはアメリカで美術やデザインを学び、現在は創作キャンドルをはじめフリーな立場で活躍されています。楽しい会になりそうです。



11世紀に中国で開発された
活字膠泥ごうでい

本は文明のともし火(その一)

—文化の担い手としての本の役割—

志賀 紀子

◇言葉は消えても文字は残る

図書設計家協会の去年の手締めの際に、私は二つの世紀を生きて体験することのおもしろさ、といったことを話した覚えがある。でもそれは本当に私

の実感なのである。

最近必要があつて、幕末から明治にかけて来日した外国人が、「自分の目で見た日本」について著した本を、何冊か読んだ(一八四〇〜九〇年代の著作)。これがなかなかおもしろい。

その著者の誰もが感嘆しているのは、日本人の識字率の高さと吸収力の早さ、そしてその層の厚さなのである。

当時の欧米、ロシアなどでは貴族の子弟への教育は積極的ななされていたが、一般庶民や子供たちへのそれはほとんど行われていなかった。おとなですら文字の読めない人はいた。

わが国では武家内での教育はもとより、江戸中期になって自然発生的に寺子屋教育が広まり、幕末にかけて全国的に普及したという。女・子どもを問わず、ちよつと手があれば本を広げて

読んでいる庶民の姿に、彼らは圧倒されたらしい。

そして寺子屋教育が幕府からの強制的なものでなく、自主的に行なわれていること、その地方の必要性に応じて商業の盛んな地域では計算をも加えていることに触れている。いわゆる「読み、書き、そろばん」教育である。

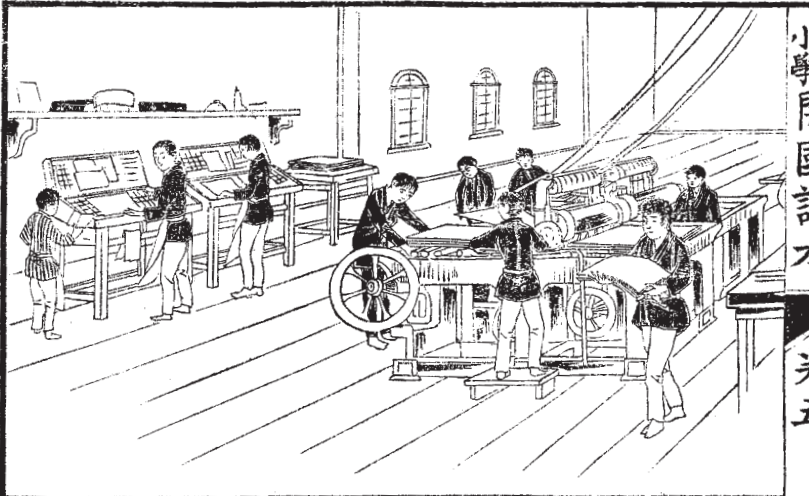
一八六〇年に来日し、ロシア正教の布教に尽力したニコライ司祭(後にニコライ聖堂を創設)などは、一般庶民がこれほど自由に本を手に行けることに驚き、当時町中にたくさんあつた貸本屋の実態まで分析している。

だが当時はまだ、いわゆる西洋の活版印刷が一般には普及されてはいなかったから、これは皆手彫り、手摺りの江戸板本であつたようだ。余談になるが私は以前骨董屋で、この江戸板本(製版法という)の不要になつた板で造られた手あぶり火鉢を見たことがある。平仮名のくずし字を流麗に彫つた四枚の板本を組み合わせた、見事なものであつた。

活版

雑誌

印刷



小學開國読本

第十九 活版

子等の持てる書物ハ、
 何よりて印刷せら
 るるか。又、新聞紙、雑誌
 のるおはいらん。
 此れ等ハ、多く活版より
 よりて、印刷せられ
 るものあり。新聞紙、雜

活版印刷術の解説。明治28年『尋常小学開国読本』(山梨図書出版社)より

さて、近代の活版技術の発達と紙の歴史について、私が一つだけ驚いたことがある。

中国で二世紀に発明された製紙法が、七世紀には朝鮮を通じて日本に伝わったことはよく知られている。だが印刷の方は、十五世紀にグーテンベルクによって発明された活版印刷が、より高度な近代印刷技術として発展し、十九世紀になって日本に導入されたものだとは私は思っていた。だがこれも東洋の方が早かったのである。

このことを私は、二〇〇三年に凸版の印刷博物館で公開された「活字文明開花―本木昌造が築いた近代」という展覧会をみて、初めて知った。この展覧会は得るものが実に多かつたし、カタログも貴重であった。

いわゆる印刷術は、六世紀に中国で発明された。また一字ずつを独立して扱う活版印刷も、十一世紀に中国で開発され、それらが朝鮮に渡って十四世紀に金属活字となり、十六世紀には日本に伝えられている。ただ一方で摺り

の役を担う印刷機械を発明しなかったことで、十七世紀半ばにはもとの製版方式に戻ってしまったらしい。

ただし逆な意味では、従来の製版方式の十数世紀に及ぶ歴史は、江戸時代には頂点を極めて出版文化を支えている。ニコライの見たのもこれであった。

一方、西洋からの活字文化も、同じく十六世紀に来日したザビエルなどの、キリスト教宣教師によって伝えられているが、十七世紀の幕府による鎖国政策によって、十九世紀半ばまで閉ざされてしまう。さて、幕末になって鎖国を解き、西欧への門戸を開いた日本に、どっと入ってきた西洋式活版印刷の技術は、そのままでは日本文字には適さなかつた。

数十字のあるアルファベットで表わされる表音文字の欧文とは違い、漢字から発生した日本の文字は、表意文字なのである。漢字だけでも数千字あるのに、さらに片仮名・平仮名が加わる。この難問に取り組んだのが本木昌

造だったのである。

彼は電胎式と呼ばれる鑄造技法に目をつけ、研究を重ねたうえ、長崎に活版伝習所を設立する。一八六九（明治二）年に来日したアメリカ人ガンのブルの指導によって、新しい電胎活字はようやく誕生したのである。

さて、洋の東西を問わず、製紙技術の発達によって紙が量産できるようになるまで、紙は大変貴重なものだったから、どの国でも一般庶民は紙の代わりになるようなものを使っていたらしい。ロシアでは白樺の皮を剥いてその裏に文字を書いたり刻んだりしていた。私もこれらの皮作品を博物館で何度も目にすることがある。

ところで数年前の正月にお寺巡りをしたことがあった。ある寺の庭で、冬だというのに青々とした大きな葉をつけている大木にめぐりあつた。あまり見事なので、案内の寺の方に木の名前を尋ねると、次のように話された。

「これはよしの木と言って、この葉をとって裏に文字を刻むと、立派に文

字が読めるのです。紙の貴重だった江戸時代に庶民はこれを利用したそうです。葉書の語源です」。

どうぞ一枚お取りになって験してみても下さいと言われて、大事に持って帰ったその葉に、早速千枚通しで文字を刻みつけてみた。なるほど、書いてすぐでも読めるが、翌日ぐらいの方が、字が浮き上がってはつきり読める。葉書の役割は十分に果たせるのである。

さて、十九世紀から二十世紀にかけて、日本がなしたげた幕末・明治の大変革は、活字、製版、紙による印刷技術の急速な近代化によるところが多い。そしてこれを普及させたのが「本」書物だといっても過言ではない。とくに急を要した外国語の学習や翻訳に、活字本は絶対に欠かせないものだった。「本」はしっかりと時代を見据えていたのである。

◇本に影響されて育った子供時代
小学校入学前から中学時代まで、私

は本に囲まれて生活していた。毎月届く本は、幼稚園の時から読んでいた「キンダーブック」「子供の友」そして「講談社の絵本」であった。合わせて五六冊にもなったが、それを姉兄と三人でうばいあつて読んでいた。

いわゆる大正リベラリズムのもとで、新しい理念に基づいて創設された私立の学校が次々と生まれ、大正から昭和の初めは活気のある時代であった。

「子供の友」(婦人の友社・一九一四年創刊)は、独自の教育理念で「自由学園」を創立した羽仁もと子・吉一夫妻による絵本雑誌である。絵を描いていたのは、当時ロシア・アヴァンギャルドの影響を強く受けて斬新な画風を展開していた村山知義や、武井武雄、竹久夢二などの個性派の画家たちであつた。

もう一つの「講談社の絵本」は一九三六年に創刊され、当時のそうそうたる画家たちが絵筆をとつた。内容は偉人伝とか昔話が多かったが、一冊六四ページ、オールカラーという豪華

なものが、毎月三〜四冊も出ていた。

その頃の印刷機能としてはこれは大変なことだったらしい。一方の印刷用紙の方も既存のものではうまく色がのらず、王子製紙が特別紙を開発してこれにあてたそうである。オフセット技術の向上の意味でも画期的なことであつたという。私は、今でもあの絵本の色の鮮やかさをはつきりと憶えている。

このように、戦前の日本の児童教育への熱意と、新しい絵本の展開には目覚ましいものがあつたが、一九三九年に第二次世界大戦が始まると、印刷物資の不足により、絵本および雑誌類は、一九四四年頃までにはほとんどは廃刊に追い込まれてしまう。

第二次大戦が最終段階を迎える頃、私は中学に入り、そして米軍機の空襲が目増しに激しくなると、どこかの家でも庭先に防空壕を掘らされた。だが父は「そんなものは何の役にも立たない」といって、食堂のがつしりした大きなテーブルの上と周囲に、外国雑誌を山



筆者装丁の『感覚の地図帳』（講談社）

と積み上げ、家の中の防空壕を作った。「直撃ならば仕方がない。だが周りの火事で火の粉が舞うくらいなら、わが家は土壁だから火に強いし、いざとなればこの雑誌に水をかければ大丈夫。外国雑誌の紙には泥が入っているから」と父は言った。アート紙のことである。

父は大正の中頃にアメリカとイギリスに六年ほど留学し、けっこう遊びながらも好きなことはしっかりと勉強してきたらしくて、家には芸術・建築関係の本や、当時の外国雑誌が沢山あった。空襲は毎晩のように続いたが、郊外

にあったわが家は直撃を受けることはなかった。ただその屋内防空壕から出ることは許されなかつたので、退屈した私は周囲の雑誌を抜き出しては眺めていた。その中に「ユーゲント」というドイツの雑誌があつた。

当時いつも耳にした「ヒットラー・ユーゲント」とはずいぶん違うなあ、と思いつつも、その雑誌の自由さと進歩性には子ども心にも惹かれるものがあつてよく眺めていた。戦後、ぼろぼろになつたその雑誌の一部を、今でも大事にとつてある。

ブックデザインの仕事をするようになってから、ある時凸版印刷の主催した展覧会を見に行ったことがある。会場に隅に鍵をかけたガラスケースがあり、その中に数冊の外国雑誌が展示されていた。「幻の雑誌『ユーゲント』とある。私はその説明の前に釘づになった。私に見ていたのもこの雑誌だつたのだ！と胸の熱くなる思いだつた。

それから数年して、講談社の「学術

文庫」の仕事の中で偶然『世紀末ドイツの若者』（上山安敏著）という本の装丁をした。その本にユーゲントの運動のあらましが述べられていたのである。

「ユーゲント」とは、パリやウィーンに象徴されるデカダンな世紀末派とは違い、世紀末を次の世紀へ向けての新たな転換期としてとらえた、未来志向の運動であり、主体は若者であつた（ユーゲントとは若者の意味）。感動的な二つの出会いであつた。（つづく）

（しが・のりこ／東京都生れ。自由学園および桑沢デザイン研究所卒。一九六一年より一貫してブックデザインの仕事に携わる。装幀のみならず医学書の解剖書の図版構成など、本の内容と深く関わった仕事を手がける。桑沢デザイン研究所講師を経て、志賀工業デザイン研究所主宰。著書に「子どもは地球の未来を担う」モスクワ・プログレス出版社刊。）

日本の絞り染と 安藤さんの仕事(二)

安藤さんによる絞り染の展覧会は、昨年も銀座ミキモト・ホールでの「安藤宏子・日本の色展」や、鎌倉古陶美術館の「安藤宏子の世界・絞り染の魅力を探る」などが開催された。これら



木綿地幾何学文様着物

は自身の作品だけでなく、日本各地の絞り染の紹介、その技法と色彩の実物による解説など、今まで誰も試みたことのない規模の会であった。目からウロコが落ちる思いをした来会者も多かったにちがいない。

また安藤さんは、自身の出生地にちなむ豊後絞^{ぶんご}りや三浦絞りの研究にも努められた。さらに一九九二年には失われた技法を含む一〇

種近い絞りを、実物見本裂地と詳しい工程写真で解説した日本でも初の技法書を、NHK出版協会から上梓された。これから絞り染を志す人は、それらの研究からもぜひ学んで欲しいと思う。

(志賀直邦)

あとがき

近ごろ新聞を読むのも、文献、資料を調べるのも、美術工芸品の売買もインターネットを利用する人が多いようだ。何かと簡便だが、そこには思索、実感、挫折体験などを経た人格の形成など望むべくもない。

文明の発展に、言葉と、文字と本(書物)がどれほどの役割を果たしたか、その人間の文化の集積から、いま何を学ぶべきか。そして未来に何を残したらよいのか。

より良い本の制作に一生の志を立ててから半世紀あまり、本の制作の現場に身をおいたある図書設計家の遺稿『本は文明のともし火』(原題は「本へのつきない片思い」・図書設計・63号所収)を三回に分けて掲載する。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)